

# ふるさと だより

ANAが覗く、ふるさとの想いと熱意



ANA FURUSATO  
PAYMENT OF TAXES

////

ISSUED BY

**ANA**  
Inspiration of JAPAN

2017.10

Vol.

03

//// 特集：ふるさとSTORY ////

北海道

しらぬかちょう

# 白糠町

北海道の生乳で本場の味を  
全国から学びに集う白糠町のチーズ工房

ふるさと自慢の逸品

全国の自治体が誇る、旬の返礼品を揃えました

Color of Earth 兵庫県／竹田城跡

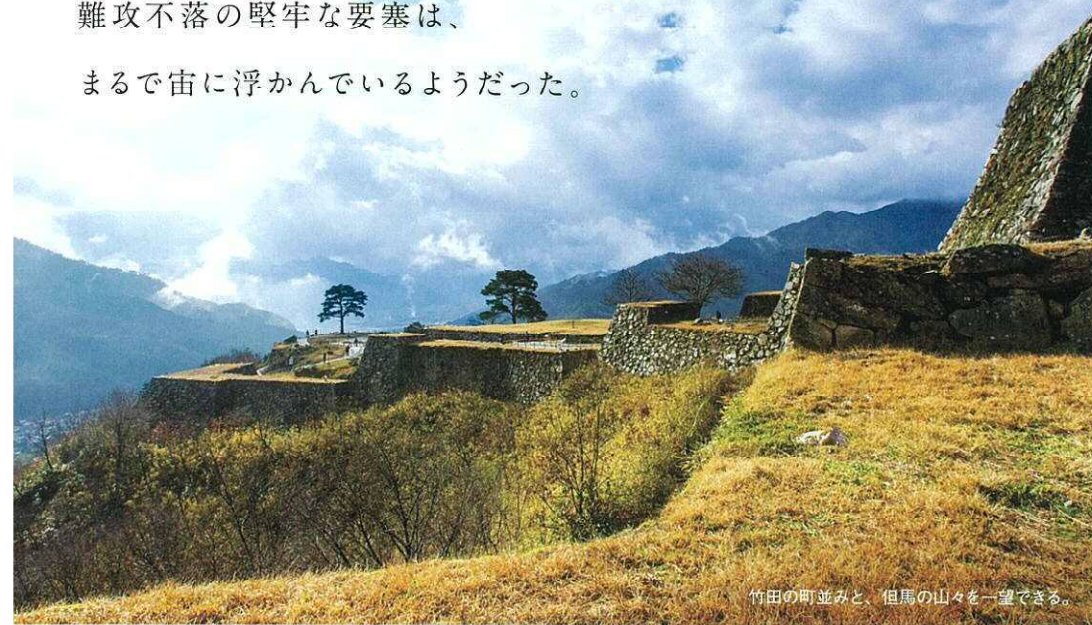
日本のマチュピチュ、雲海に佇む神秘的の光景を望む



眼下に広がる竹田の町並み、但馬の山々。

難攻不落の堅牢な要塞は、

まるで宙に浮かんでいるようだった。



竹田の町並みと、但馬の山々を一望できる。



険しい地形にありながら、曲輪のすべてを石垣で取り囲んだ総石垣の城郭。



左上/小さな祠は雲海を求む旅人たちの心の拠り所だ。左下/苔むした岩が一面に転がっている。右/ぬかるんだ地面を慎重に進む。

一度くらいは耳にしたことはあるだろうか。雲海に浮かぶ天空の城。正確には石垣が残る城跡だが、その幻想的な姿は兵庫県内でも屈指の名所となっている。その人気は姫路城にも勝るとも劣らない。しかし、そんな神秘的な光景がいつでも見られるというわけではない。果たして、天空の城は姿を現してくれるのだろうか。

**天空の城を見るために**

まだ陽が昇る前の薄暗い山道に登るのは他でもない。雲海に浮かぶ天空の城「竹田城跡」を見るためだ。城跡の南東に位置するこの立雲峡は、雲海に浮かぶ竹田城跡が見られる絶景ポイントとして知られている。まだ眠い体に鞭を打ち、肌寒い気温のなか期待に胸を膨らませ歩いて行く。お世辞にも整備されているとはいえない。山道は、昨日降った雨でぬかるんだ地面が行く手を阻んでいた。まるで絶景への意気を試されているようだった。

進めば進むほど期待と不安は高まっていく。それでもそれは、雲海はいつでも見られるというわけではない。良く晴れた風の弱い日という天候に加え、日中との寒暖差が10度以上なければならぬという条件があるのだ。この日の天候は曇り。あいにく日中との寒暖差もさほどなく、条件的にはかなり不利な状況であることは理解しつつも、「見られるかもしれない」という微かな希望を持って歩みを進めていた。道中、小さな祠が目にとまった。ここを通る誰もがしてきたであろう、手を合わせ雲海が現れるようお願いを込めて強く祈った。



北近畿豊岡自動車道・播但連絡道路の和田山ICから約10分  
※時期によって入城時間が異なります。

絶景には時として厳しい条件が重なるものである。希少な景色であるほど、人々の心を動かすのは確かだ。見られるか見られないか。本物の絶景とは、いつだって真剣勝負なのだから。



左：地元の食材を使用した旬の料理が味わえる。右：明治期に建てられた建物をリノベート。客室にはどこか昔なつかしい雰囲気がある。

かつての城下町を彷彿させるような風情ある町並み。



のシャッターを切る音だけが響いている。雲海は午前8時頃まで見られたがそれまでこの山を降りる者は一人もいなかった。

### 城主たちが眺めた景色

竹田城跡には二つの顔がある。一つは先述の「天空の城」として。そしてもう一つは「日本のマチュピチュ

チュ」である。現在も残された石垣の姿がペルーのマチュピチュに似ていることが所以だが、日本の山城として、ここまで遺構が残っているのは極めて稀なケースだ。今度はその城跡に足を踏み入れるため、山頂に竹田城跡がある古城山に登って行く。もう一つの顔はすぐそこにまで迫っていた。

圧倒的な光景だった。確かに城はない。しかし残された石垣がこれほどまでの存在感を放っているようとは予想だにしていなかった。現代に残された石垣たちはそれぞれの積み上げられた場所から微動だにしない。与えられた責務を全うする当時の威容をそのままに誇る姿は、まるで現在も石垣の上に城を支えているかの

ように見えるほどだ。現存する山城としては日本最大級という広大な敷地の天守台からは、かつて城下町があった町並みや円山川まで見渡せる。城主たちが眺めてきたであろう、360度絶景に囲まれた大パノラマが広がっていた。

### 竹田城の歴史

竹田城は但馬の守護大名、山名宗全が播磨侵略のため13年を費やして築いたと伝えられている。羽柴秀吉の2度の但馬征伐で家臣の赤松広秀が城主となり、豪壮な石垣積みみの城郭を築いたという。石垣の積み方は織田信長の安土城と同じ「穴太積み」という技術が用いられている。石材は現地や山麓付近から集めたものと考えられ、大きいものは5トンにも及ぶとか。築城に関しては不明な点も多いが、山の地形を防御に活用するなど軍略に堪能な人の手による構築と言える。廃城から400年を経た現在でも、城主の帰りを待っているようにも感じられた。

# 日本のマチュピチュ 竹田城跡

取材・文=川上 亮  
写真=小島マサヒロ

### 立雲峡から見る幻想

心臓破りの坂を越えると人の姿が見えて来た。ついに目的地である第一展望台に到着したのだ。そして同時に目に飛び込んできたのは、祈りが届いたのだろうか、紛れもなく雄大な雲海に浮かぶ天空の城だった。ここまでの苦勞が一気に吹き飛ばすような大絶景が目の前に広がっていた。雲海は静かに形を変えながら幾度も竹田城跡を包み込んでいく。一瞬たりとも目が離せない。その神秘的な姿に、ここにいる誰もが息を呑んでいた。それを象徴するように誰も言葉が発さず、ただカメラ

Color of Earth

色褪せない体験を

兵庫県/竹田城跡